

視察先別報告 東ティモール

【草の根技術協力】

農村女性による経済活動の強化

概要

農村では依然として低い女性の地位や収入を向上させるため、アイナロ県マウベシ郡において、コーヒー生産農家の女性グループによる食品加工プロジェクトを実施してきたNGO（特定非営利活動法人パルシック）。市場調査に基づいて地域資源を活用した特産品を決め、遠隔地へ販路を拡大するための支援を実施。

01

大浦 正人 視察先は、大変な悪路を車で約3時間。まさに僻地、偏狭というにふさわしい場所でした。そこには生活があり懸命に生きる女性の姿がありました。女性たちは、グループを形成して、地元の産品加工品を作り販売し、それによって収入を得られる様にしていました。手にした現金で何をかうのかと尋ねたら、マーケットに行って生活物資を購入すると言います。そのような場所で支援者は農作物の加工方法やパッケージングをアドバイスして商品化し、販路を開拓し彼女たちの収入に繋がるようにしています。支援が失敗し収入が伴わなければ、女性たちは夫や家族の理解や協力が得られず活動の継続を断念せざるを得なくなるのは容易に想像出来ます。まさに支援の先に生活があります。現実に向き合い賢明に支援する日本人の姿から、人間のやさしさを強烈に感じました。

02

太田原 奈都乃 ディリ市街から100km離れたマウベシ郡。ここでは女性たちが新しい形で自身の生活を創造し始めていた。パルシックの支援のもと、数人の女性が集まって紅茶やハチミツなどの食品加工を協力して行う。丁寧に包装された紅茶は、1パック25セントで販売される。ハノイバオイン（現地語で 未来に向けて考える の意）というグループの女性の一人が「夢は街に自家製レストランを開くこと」と語る姿に、私は自分のことのように希望と喜びを感じた。都市部では収入の大半を冠婚葬祭に費やす家庭は多くはないが、地方ではこのような家庭も未だに多く生活費不足に陥ることが多かったが、各家庭に家計簿をつけさせることで現状を見直したそうだ。このようにパルシックの地道な活動によって、女性たちが彼女たちなりに自立するのを助けていた。

03

川辺 絵梨 結果が見えるまでのモチベーション維持に苦労されている様子であった。歴史的背景により、現在でも短絡的で、長期的な観点を持つことが難しいようだ。そのような女性たちに、他のグループの成功例などを提示し、改善や工夫を促し、軌道に乗せる支援を行っている。今回訪問した女性グループは活動がうまくいっており、「市場のニーズ（好み）を研究していきたい」「将来的にはレストランやショップを作りたい」との目標を語ってくれた。また、「時に忍耐が必要なことを日本人に教わった」との声も聞かれ、忍耐強く努力する日本人の姿勢が伝わっているのだと感じられた。さらに、日本市場開拓の支援は、世界一品質に厳しいといわれる日本市場に参加できているという彼女たちの自信に繋がられるのではないかと思った。

04

木村 みゆき マウベシにあるパルシックの事務所までは首都ディリから100kmの道のりがありました。途中の道のりはパリダカ並みの悪路でした。そこからさらに30分進み、雨季には渡れなくなるだろうと予想される川を2つ渡ったところに視察先の農村はありました。あらゆる事に閉鎖的である状況は見て取れました。しかし、日本人と忍耐強く歩み寄る事で知識と方法を得た事や日本の市場を確保できた事に感謝し、今後もトレーニングを積んで店を持ちたいというグループリーダーのアンジェリーナさんの話から、草の根技術協力事業ならではの醍醐味を感じました。また全てをお膳立てされたものではなく鈴木桃子専門家と一緒に失敗や挫折、試行錯誤を繰り返した中で得たものは夢を持つという事。女性にフォーカスした支援活動として更なる展開を期待し願うものです。

05

後藤 恵美

訪問前は、草の根技術協力事業としての活動内容は女性グループによる地域の特産品を使った商品開発・販路拡大に取り組むことだけだと理解していた。しかし、実際に現地での活動に携わっている鈴木専門家に話を伺って冠婚葬祭のために派手にお金を使い、日々の生活に困る村民が多く、そのようなお金の使い方を見直すために家計簿のような記録を付ける指導までされているということを知った。これが最も印象的な話であった。冠婚葬祭への出費は地域の文化や風習に根付いていることが多く、その意識を変えることは容易ではない。そのような中で、地域の方々と話し合い、相手を敬いながらプロジェクトを遂行している鈴木専門家の奮闘振りに感銘を受けた。

06

塩澄 志麻

東ティモールの山奥に「思いやり」の種を蒔き、現地の女性と一緒に育てている鈴木専門家。社会でも家庭でも発言権がないコーヒー生産農家の女性達がグループを作り、無農薬ハーブティー、蜂蜜、ソラマメチップスなどを一生懸命作って収入を得ていた。今では、夫の理解が得られ収入を得、集会所も建てられるまでに成長した。支援している側でありつつも、「無農薬ハーブティーを通して、東ティモールの女性から私達も支援してもらっているのではないかとそう気づいた取り組みだった。

07

武田 義久

人口の約8割(70万人)が農業に従事していて、平地が少ない東ティモールでは、大多数の人々が、急勾配の山道の脇に集落を作り暮らしている。未だインフラ整備がなされていない山岳地帯の道、カーブの多い道のあちらこちらにある陥没を避けながら100km進み、標高1500mにある農村のマウベシ郡に到着。収入源、そして農業自体の多角化が必要とされている中、農村女性の収入向上、生活向上のため、活動を続けている鈴木専門家の目は、きらきらと輝いていた。支援のポイントは市場開拓、品質改善、パッケージ改善で、女性チームのモチベーションを向上させるのは、現実的な目に見える収入向上が必要不可欠であると感じた。そして、長すぎた支配下時代の影響を受けた短期的な思考をポジティブ思考に改善していく道のりは遠く感じた。

08

田中 香織

東ティモールの主要産業であるコーヒー農家の方々の生活に密着したNGOだからこそできる活動だと感じた。貧困削減という課題に対し、注目されがちな収入増加といった側面だけの活動ではなく家計の支出に着目し、家計を担うしっかり者の女性たちへのアプローチを行っている点が大変面白い。自発的な活動を尊重し、単に与える支援ではなく、地元の方々には難しい国際市場の開拓や都市部への輸送などを補完する支援がされている。東ティモールの方々と近い立場にいるからこそ現地の人が出来ることと出来ないことを明確にして働く、それが同じ目線での支援ではないかと感じた。商売として成立させるのは大変なことだが、自信たっぷりに働く女性たちの姿を見て頼もしかった。これからもあきらめずに前進して行ってほしいと思う。

09

藤島 誠人

この視察の中で唯一地方に赴いた。首都ディリから100kmほど離れた場所に視察先があった。ディリなどの都市との格差が大きく、インフラ整備もほとんどなされておらず、自給自足的な生活をしてきた。女性はグループを作り、茶、はちみつ、バナナ、キャッサバなどを加工し、生活を支えていた。最も驚いたことは、女性グループが夢をもって活動に取り組むことができていることだ。土地を買ってレストランをつくりたい、加工品の年間の売り上げを1000ドル以上にしたいなど高い目標を掲げていた。その目標に向かって日々工夫をしており、支出計画や収穫向上を進めてきた。現時点では、コーヒー事業と女性事業を合わせた貯蓄が、多い人で5000ドルあるという成果もでてきている。これから先、ここでつくった加工品を日本で多く見られるようになることを楽しみにしたい。

10

藤岡 裕巳

視察先に行くまでの道のりに驚かされた。舗装されていない道路や、舗装されているが欠落している箇所があり、でこぼこになっている道路が続く道りであった。現地農村女性グループの活動が直に見られた視察であった。地域資源を活用して生産活動を仕事にするこの取り組みは、現地の方に大きな夢と希望を持たせている。農村地区の女性の地位は低く、家庭や地域における発言権は制約されているようであるが、この活動が浸透してきた今では、家族の協力や理解が得られ、女性が働くことについて違和感もなくなってきたように感じた。支援成果も出ており、ものづくりの基盤はできたように感じたが、働く農村女性の多くは経営感覚が身につけていないという問題点があることも分かった。国全体で初等教育(小学校で学ぶ足し算や引き算など基本的な学びなど)の必要性を感じた。